復刻版 全3巻・別冊1（解説・総目次・索引）

全39冊（1946年7月～1950年3月）原本発行：八重山文芸協会／八重山文化社

YAEYAMA BUNKA

八重山文化

自治意識の高まりの中で活字文化の「黄金時代」を迎えた戦後の八重山

「地方文化の確立」を掲げて創刊した総合文化誌を復刻

八重山音楽協会、八重山演劇協会との連携、引揚者の活躍、全琉随一の宝

体裁：B５判（第１・２巻）・A５判（第３巻）・上製本・総1,350頁

解説：三木 健（ジャーナリスト・八重山近現代史研究者）――八重山「小国家」時代の原動力

別冊分売価格：本体1,000円＋税　ISBN978-4-8350-7658-4

推薦：砂川哲雄・仲程昌徳・近藤健一郎

原本提供：瀬名波長宏

定価：本体69,000円＋税　ISBN978-4-8350-7653-9　　刊行：2015年7月　**不二出版**

復刻版概要

八重山文化 復刻版 全3巻 別冊1

●原本発行機関＝八重山文芸協会／八重山文化社（第23号より）

●復刻版収録内容【全39冊収録】

第1巻　通巻第1号～第14号（1946年7月～47年10月）

第2巻　通巻第15号～第29号（第30号 欠番）（1947年11月～49年5月）

第3巻　通巻第31号～第40号（1949年6月～50年3月）

（※通巻号数は不二出版で付した号があります。）

●体裁＝B5判・A5判・上製・総1,530頁

●別冊＝解説・総目次・索引（A5判並製・100頁）

別冊のみ分売可＝本体1,000円＋税

ISBN978-4-8350-7658-4

●解説＝三木 健（ジャーナリスト・八重山近現代史研究者）

――八重山「小国家」時代の原動力

●推薦＝砂川哲雄（八重山文化研究会）

仲程昌徳（琉球大学元教員）

近藤健一郎（北海道大学教員）

●原本提供＝瀬名波長宏（石垣市）

●刊行＝2015年7月刊行

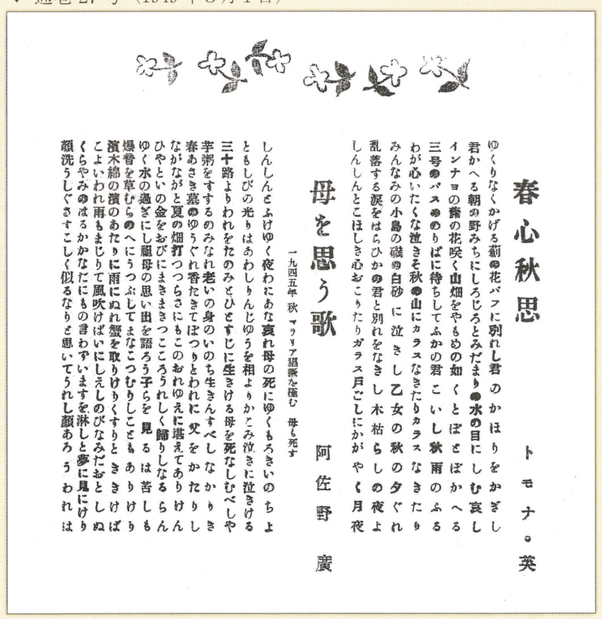
●定価＝本体69,000円＋税

ISBN978-4-8350-7653-9

▼ 別冊 総目次

日本と世界情勢　ポツダム宣言とはどんなものか／外人記者の見た敗戦一年の日本の姿／奇想天外な答案／女警察官　宮島　西人　28
首里月明――在りし日の首里をうたへる（＊詩）　大濱　信光　14―20
純情二曲（＊詩）　喜友名英文　15―16
古見の橋（＊詩）　宮良しんせい　16―17
今は無き母に（＊詩）　村山　秀雄　17―18
ジープ　編輯後記　21
詩作への道　奥付　表4
童謡誕生論　伊波　南哲　22―23
戦災都市調　喜友名英文　24―25
黒潮吟社俳句集（天位／地位／人位／五客／佳調）／選者吟　古藤　雅童（選）　25
読者のページ　青年論壇　26
我等の歩道　桃原　眞宣　26―27
海（詩）　大島　修　27
真心（詩）　國島　彌生　28
伊江島（詩）　先島郡島全住民二告グ　28
名蔵行（＊短歌）　野村　芳樹　28
八重島　精　糸を繰る人々（絵と文）　28
薪取り（＊短歌）　宮島　西人　28
医者の過剰生産　28
戯曲　オヤケアカハチ・ホンカハラ　大濱　信光　29―35
『八重山文化』賛助員芳名　35
文化日誌（自十一月一日至十一月三十日）　表3
編輯後記　表3
奥付　表4
通巻第七号　一九四七年新年号　一九四七年一月一日発行　表1
表紙（絵と彫刀）　古藤　實富　表1
お正月（＊詩）　伊波　南哲　表2
目次　表2
先島郡島全住民二告グ　軍　政　官　挟1
糸を繰る人々（絵と文）　古藤　實富　前1
巻頭言　（4）

▼ 通巻27号（1949年3月1日）



春心秋思

トモナ。英

ゆくりなくかげる薊の花バフに別れし君のかほりをかぎし君かへる朝の野みちにしろじろとみだまり●水の目にしむ哀しインナヨの露の花咲く山畑をやもめの如くとぼとぼかへる三号のバスののりばに待らしてふかの君こいし秋雨のふるわが心いたくなき泣き秋●山にカラスなきたりカラスなきたりみんなみの小島の磯の白砂に泣きし乙女の秋の夕ぐれ乱蕃する涙をはらひの君と別れをなきし木枯らしの夜よしんしんとこほしき心おこりたりガラス戸ごしにかがやく月夜

母を思う歌

阿佐野　廣

一九四五年 秋 マラリア追慕を偲び 母し死す

しんしんとふけゆく夜わにあな哀れ母の死にゆくもろきいのちよともしびの光りはあわしりんじゆうを相よりかとみ泣きに泣きける三十路よりわれをたのみとひとすじに生きける母を死なしむべしや芋粥をすするのみなれ老いの身のいのち生きんすべしなかりき春あさき嘉のゆうべれ看たきてぼつりとわれに文をかたりしながながと夏の畑打つらさにもこのおれゆえに造えてありけんひやといの金をおびにまきまきつこころうれしく歸りしなるらんゆく水の憑きにし麗母の思い出を踏ろう子らを見るは苦しも爆雷を草むらへにつふしてまなこつむりしこともありけり濱木綿の濱のあたりに雨にぬれ蟹を取りけりくすりとき きけばこよいわれ雨もまじりて風吹けばいにしえしのびなみだおとしぬくらやみのはるかかなたにものまわずいますを淋しと夢に見にけり顔洗うしぐさすこしく似るなりと思いてうれし顔あろうわれは

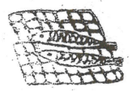
●表示価格はすべて税別

不二出版
〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシミリ03-3812-4464
振替 00160-2-94084
2015/7

内容見本

▼ 通巻15号（1947年11月1日）

私が最近讀んだ書物から



沖縄女性史を讀みて

（伊波普猷著）

富村 眞演

沖縄の女性は一般に内氣で、引込主義で、凡そ民主々義生活とは縁遠い存在の如く見受られるが、本來の性格と素質は果してどうなものだらうか。現代の女性を知る爲には、それを育成した過去の姿を正しく歴史的に考察することのみによつて正統な判斷が下される。上代に於ては沖縄の女性は自由快活で而も勇敢であつた。政教一致時代に於ては、祭祀をたづさはる聞得大君は國民最高の神官であり、政治的にも支配的地位にあつたことは當然である。ローマの火の神を祀らせる爲においた尼僧即ちエスタの處女や、日本に於ては神功皇后に劣らぬ威勢を得たものであつた。尚眞王時代一五〇〇年、八重山のオヤケ赤蜂征伐に從軍した久米島の君南風（神官）の祈禱の勝の要因だと時人は信じた。或は與那國島にサカイ・イソバと言ふ女王が島民を支配してゐたとの口碑がある之等の沖縄の女性が性格的に勇壮活潑で沖縄諸島に於ても古く女子の位置が決して低くなかつたことを物語つてゐる。而るに一六〇九年薩長の役後薩摩の奴隷政策の爲に彼女等も人間的性格を失ひ、自由を奪われ、且又儒教と佛教の勃興と其の思想の浸潤は全く女性の位置を轉落させ、男尊女卑の弊風を社會に確立させた。儒教や佛教ではその根本思想として女子を非常に卑しめてゐる。儒教には三從、七去といふ教があつて女子は一生の苦樂を他人に依ると言ふ。又佛教では五障といふ罪劫の深いものを婦人と言つてゐる。その報として女子は懐妊出産等の苦惱があると言つてゐる位である。尚家三百年間の治政下に於ける儒教の感化は沖縄婦人の思想界に深く根を張り、枝を擴げて、古代の勇壮快活潑溂たる面目を覆い、變質變形した女性の性格を形成したのである。明治の王政維新は沖縄をして薩摩より開ことは史實が證明してゐる。敗戰の結果男女同權は實現され、家庭生活を本領とした女性にも自由な社會人として活動する權威が與へられた。古代よりの女性の苦悶と悲願が、儒教的な精神化のみ謳歌した日本の敗戰に

▼ 通巻29号（1949年5月1日）

八重山文學

卷頭言

沖縄の黄金時代は十五、六世紀で、尚王統が三山を統一し海外貿易を奨勵した時であつた。其の頃を中頃とした十二世紀から十七世紀にかけての五百年間にわたる「おもろ」を集めたものが歌數千五百五十一首全二十二卷の「おもろさうし」である

あがる三日月がなし
あがる三日月や
かみぎやかなまゆみ
あがるあかぼしや
かみぎやかなまゝき
あがるぼれぼしや
かみがきしくせ
あがるのちくもは
かみがまなきゝおび

【譯】

あれ、天なる三日月は
あれ、御神の金眞弓
あれ、天なる明星は
あれ、御神の金やじり
あれ、天なる群星は
あれ、御神の花櫛
あれ、天なる横雲は
あれ、御神の白布帶

（伊波普猷 譯）

その素朴清純な自然の讃美、人間と神との交流、詩的感覺の深さ鋭さ、西洋の象徴詩を思わせてブラウニングの「春の朝」などに通うものを感じる。それにもましたその豁達にして奔放なリズムは吾々の胸をおどらすものがあり、海洋民族としてのしぶきを身に浴びる思いがする

あれから後、時代は一轉し又再轉してアメリカの保護占領の下に今や琉球は政治、經濟、文化、貿易とあらゆる面に過去の弱少と虐げの中から更正されようとしているその一例とも見られよう。沖縄戰に參加し上陸後は中城熱田の米軍ユニバーシティの藝術部長だつたルー教授によつて琉球の文化藝術がシカゴで紹介された。氏は、「沖縄のオペラは綜合藝術である。恐らく沖縄文化の最も著しい特質はその藝術の相互關連性にあり一生を綜合藝術の實現につとめたワグナーは何らの理論も知性化もしないで發達した沖縄オペラの傳統を見たら驚いたに違いない」と讃めている。

由來吾々琉球人は人々の語る言葉が即ち詩の言葉であり歌う言葉が即ち語る言葉であつた。即ち詩情と自由語があれば即ち詩歌や舞踊が成立し、生活の中にそれらが渾融した。

「女（ゆなぐ）ぬ心おゆつたいぐわつたい、たあぐぬ水ぐくるやいびーささり。

の單なる常語がセンスル節になり、一此ぬゆアンガマや　夏粟ぐるたらし　我んや豆なて　押し卷きあしば」が竹富の頃取まつりに島人の血をわかす巻唄となし歌われている。自然ととけあつてそれでロマンやアイディアをうしなわず生活に豊淳とはげみを與えるものとして生活と親じつなものであつた。

そうした一つのあらわれとも見られよう。「短歌がもつと發展をとげる爲には何とか口からへと（つまり書物を通じてではなく）手がるに傳えられるようにならぬものか」という意見があるが、けだし藝術が吾人の生活ともつとっ懇にならなければならぬということを意味していると思う。

かえりみて我が八重山が琉球においてもとりたてゝ詩の國歌のくにとほめそやされているが

戦後復興期の「精神的食糧」としての役割を果たす

砂川哲雄（八重山文化研究会）

敗戦後の八重山では他の地域と同様に戦前までの価値観が根底から崩れ去り、人心も治安も荒廃していた。それでも一九四六年から四、五年の間に政治、経済、農業、教育、童話、婦人関係の雑誌があいついで創刊されたのである。この時期はのちに八重山の文芸復興期と呼ばれるが、その嚆矢となったのが内容、巻数ともに充実した月刊総合誌『八重山文化』である。同誌の実質的な生みの親である村山秀雄は郷土再建のためには「精神の食糧」としての新聞、雑誌が必要であることを有志に説いて歩いた。こうして創刊された同誌の主要メンバーは当時四〇歳前後という気鋭の教育者、文芸関係者であった。

そのスタンスはまず、「新八重山建設」の一翼を文芸面から担うこと、そして中央文化を模倣することなく、「政治を倫理化し、政治を文化化し、自然を基盤とした文化、自然の中に浸透した真実の地方文化を確立せねばならない」（創刊の辞）と明確であった。執筆者の顔ぶれも多彩であり、かれらはやがて様々な分野で八重山を牽引する重要な存在となっていく。

本誌からは、混乱した状況下で復興、再建に立ち向かう八重山の人たちの姿が浮かび上がってくる。ただ残念ながら、『八重山文化』原本のバックナンバーがそろっている関係機関はおそらくない。それだけに解説、総目次、索引を別冊として加えた復刻版が発行されるのは実に有意義なことだ。今後の日本の地方史研究のうえでも貴重な資料となろう。

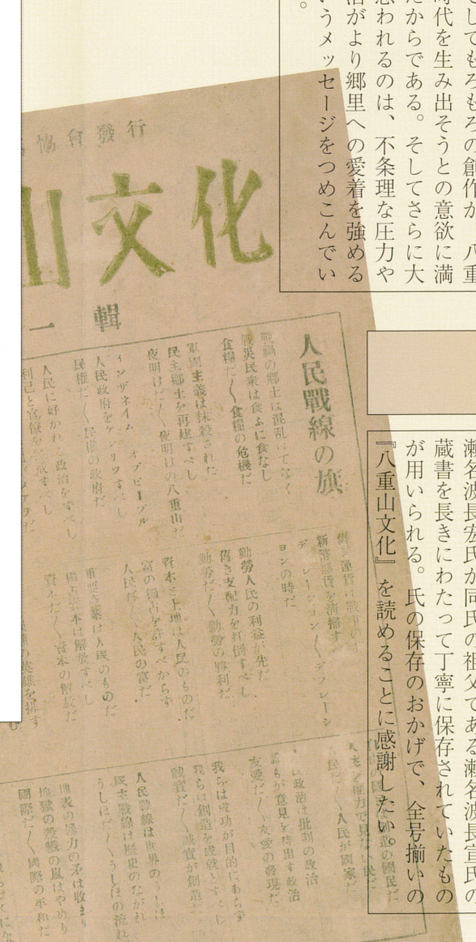
占領行政下のメッセージをつめこむ

仲程昌徳（琉球大学元教員）

一九四五年十二月二十三日、米国海軍チェース少佐は、旧八重山支庁内に各団体代表を集め「布告第一A号」を示達。一九四六年一月十五日、新八重山支庁発足。三月十九日、ラブレス中尉が軍政官として赴任。一九四七年三月二十一日、八重山支庁を八重山民政府に改称。一九五〇年八月四日、軍布令「第二十二号群島組織法」の公布を受け、九月十七日八重山群島知事の公選を実施。一九五二年三月三十一日、琉球政府の発足に伴い、群島政府解消。

八重山の戦後もそのように目まぐるしく変わっていくが、そのような占領行政の下で、八重山の人々は、のちに「文芸復興」と呼ばれることになる、一つの時代を作り出していく。そしてその呼称がけっして誇張でないことは、一九四六年一月二十三日再刊される『海南時報』以後、続々と創刊されていく新聞、同じく四六年七月創刊された『八重山文化』のあと相次いでいく雑誌の創刊が示している。それらの新聞、雑誌が、明日食べるのにも事欠くといった状況の中で雨後の筍のように出てきたことを思うと、奇跡としかいいようがない。

八重山の「文芸復興」に火をつけたのは間違いなく『八重山文化』だった。それは単に雑誌の発刊が他に先んじていたということによるのではなく、そこに掲載された諸論、諸説そしてもろもろの創作が、八重山の新しい時代を生み出そうとの意欲に満ち溢れていたからである。そしてさらに大切なことに思われるのは、不条理な圧力や不如意な生活がより郷里への愛着を強めるのであるというメッセージをつめこんでいたことである。



戦前八重山の文芸活動を地下水脈として

近藤健一郎（北海道大学教員）

『八重山文化』は、一九四六年七月に八重山文芸協会が編輯兼発行人を大濱信光（同協会会長）として創刊した雑誌である。第二次大戦後の八重山のみならず沖縄県域において創刊された最初期のものである。

その創刊号をひも解けば、祝創刊の名刺広告が海南時報社、旬刊民友社、八重山演劇協会、八重山音楽協会から寄せられている。当時の八重山において新聞、雑誌が再刊、創刊され始めるとともに、文芸と並んで演劇、音楽の文化団体も発足しており、まさに「八重山の文芸復興」というにふさわしい八重山の社会・文化状況のなかに、『八重山文化』の創刊は位置づいている。

大濱信光は、戦前期、小学校教員・校長であり、白濱冷夢などと称して詩を『沖縄教育』などに発表していたほか、一九二六年には岩崎卓爾らとともに七名で石垣の地において文芸誌『セブン』を創刊していた。『八重山文化』には、このような戦前八重山の文芸活動が地下水脈として流れている。同時に、『八重山文化』の約半数の表紙を描いた古藤実富をはじめ、戦前期を台湾など八重山以外の地で生きた人々の寄稿も多い。それらが重なり合って『八重山文化』は開花した。なお執筆者陣には、大濱信光のほか、糸洲長良、喜友名英文など学校教員が多く見られ、一九四八年に創刊される八重山教育会『新世代』の執筆者との重なりが大きいことも付言しておきたい。

このたびの復刻の底本は、すべて石垣市在住の瀬名波長宏氏が同氏の祖父である瀬名波長宣氏の蔵書を長きにわたって丁寧に保存されていたものが用いられる。氏の保存のおかげで、全号揃いの『八重山文化』を読めることに感謝したい。